

# 2018岐阜で迎える3.11復幸の日

## 3月11日(日) みんなの森 ぎふメディアコスモス

あのとき、東北は、、、



家族の軌跡～3.11の記憶から～  
大西暢夫監督 上映会&トーク

10:00 受付開始

10:30～12:45映画上映&大西暢夫監督のトーク

そして今、福島は、、、



1  
10

Fukushimaをきいてみる2017  
古波津陽監督 上映会&トーク

14:50 受付開始

15:20～17:30映画上映&古波津監督のトーク



14:00「梅弦」被災松ギターの演奏に  
合わせ被災地からの手紙を朗読



18:00 キャンドルナイト(外の広場にて)

### 14:46 黙禱

【映画等会場】メディアコスモスみんなのホール  
【鑑賞等費用】すべて無料

7年前の震災による被害、それによって散った生命、  
残された課題、風化させてはいけない意識、、、  
人間らしく生きることとは何かをあの震災は教えてく  
れているのではないのでしょうか。

一年に一度、気持ちを寄せ合う日にしたい。  
そんな想いで3回目の「復幸の日」を迎えます。

【寄付のご協力をお願い】

岐阜で迎える3.11復幸の日は、毎回ボランティア運営となっております。実施にかかる経費は、当日の広場での屋  
台の収益や、会場での皆様からの寄付などで賄っております。余剰金はすべて福島の子どものための支援金として福  
島県に送金いたします。一人でも多くの方のご賛同とご協力を賜れましたら幸いです。



【寄付口座】十六銀行三田洞支店 普通預金 1291483 特定非営利活動法人コミュニティサポートスクエア

facebook

主催 特定非営利活動法人コミュニティサポートスクエア  
〒502-0002 岐阜市栗野東2-136-2 わがや'n わおん内 (担当 杉浦陽之助)  
電話058-201-1678(090-4792-0628) E-mail sugiura@cafe-waon.com  
後援 岐阜市教育委員会

## 映画「 $\frac{1}{10}$ Fukushimaをきいてみる2017」

「福島は今、どうなっているのか？」今年もきいてみようと思います。福島に生きる人達が、何を考え、どんな話をしているか。直接聞いてきたものを伝える。これは、ただそれだけに徹した、ストレートこの上ない記録映画です。

「私が福島に生きていたとしたら、どうしているだろう？」そう考えてみることで変わることも多いはず。その役割のほんのわずかでも担えたらと願い、10年計画で始めた記録映画のシリーズ5年目です。福島で生きる人たち、そして県外で生きる人たちの思いを、ぜひ聞いてみて下さい。

■聞き手:佐藤みゆき

監督:古波津 陽(こはつ よう)

‘09年に劇場映画「築城せよ!」でデビュー。性同一性障害をテーマにした「ハイヒール革命」などの長編映画のほか、ドラマ「炎の経営者」(フジ)、「お父さんは高校生」(NHK)や、東京建物のショートフィルム「PUZZLE ROOM」、農林水産省「「知る」って、おいしい。」、beボンキッキーズ「ミナでミンワ」シリーズ、海外イリュージョンの映像監督などを手がける。

<http://no-work.com>

■この映画のHP <http://fukushima-ask.info/>

## 映画「家族の軌跡～3.11の記憶から～」

震災発生直後から宮城県東松島市を中心に、支援と取材を継続的に行って2年ほど経過したときに、地元のおばあちゃんに「ここを撮れ!」といわれたことをきっかけに映画製作を決意。

「まあ、どうぞ」と通された仮設住宅の一室。家族の遺影写真が目の中に飛び込み、空気が止まったような雰囲気包まれた。そして全身に力が入った。命日は揃って3月11日。これが東北沿岸部の現実だった。街の復興が進み、人の表情も明るくなった。しかし、玄関の内側では、、、そこに焦点を合わせたかった。玄関の内側は、心の内面と似ている。軌跡をたどるように残された家族は、今日も玄関の外へ元気よく出掛けていくのだった。

監督:大西 暢夫(おおにし のぶお)

写真家、映画監督。1968年東京生まれ。岐阜県揖斐郡池田町で育つ。東京総合写真専門学校卒業後、写真家の本橋成一さんに師事。アシスタントをするあいまいに、ダムに沈む岐阜県徳山村の取材を独自に開始する。独立後も今に至るまで全国を巡りダムに沈む村を追いつけている。そのほか精神病院閉鎖病棟、東日本大震災被災地、糸を紡ぐ長野のおばあちゃん。いずれも終わりのない長期取材を続けている。著書に「ひとりひとりの人」「糸に染まる季節」「津波の夜に 3.11の記憶」など。

## 被災松ギターとは

東日本大震災の津波でなぎ倒された宮城県東松島市の松を、世界的に有名なギターメーカー・ヤイリギター(可児市)の職人が約3カ月かけギターに仕立てた。作曲家寺本建雄さんの依頼を受け、矢入一男前社長(故人)は「寺本さんだけでなく、被災した人たちの気持ちも酌んだ」と、無償で製作を引き受けた。2012年2月、出来上がった4本のギターを、被災地復興の願いを込めて送り出した。ヤイリギターのモニターを務める青木雅芳氏は、毎年3.11が近づくとその被災松ギターを手に取り、詩や物語の読み聞かせ活動をしている庄加あき氏と、「梅枝(うめげん)」というユニットで追悼ライブを開催している。青木氏は「どんどん音がよくなってきている気がする。このギターが伝えたがっている音を伝える一人として活動していきたい。」と語っている。



被災松ギター・・・転覆する漁船や津波に呑まれる陸地を木の模様で表現しています。(Photo by 小森喜芳氏)

## 【知るということ】

7年前、東日本大震災が起きたことは、全世界の人々が報道を含め、知っていることです。しかし岐阜にいる私たちは当事者の国にいなながらも、その地震がもたらした影響というものをどれ程理解できているのでしょうか。直接の津波被害に遭われた地域の人々、原発事故の影響が大きく懸念される地域の人々、そのままその地域に住み続けている人々、震災をきっかけに故郷から離れて暮らしている人々、、、そういった当事者性の強い方々に対し、岐阜という700km以上離れた地域に暮らす私は、この7年間、どうすればいいのか常に答えを求めて東北被災地や、その後発生した震災や水害などの被災地を訪問し続けました。しかし、これだという明快な答えは未だに得られていません。そんな中、これだけは自信を持って言えるようになりました。それは「知る努力と忘れない気持ちの大切さ」と、「中途半端な決め付けの危うさ」です。無知によって巻き起こされるデリカシーの欠如、少しの情報によって広がってしまう差別や偏見、そういったことをいくつか見えてきましたが、それがどれ程当事者を苦しめることになるのかということも痛感しています。この災害後の様々なことを知るにつけ、答えを出そうなどという考え自体が不遜なのではないかと感じるようになりました。ただただ、何があったのかを知る努力と、それを忘れない気持ちを続けていくことが、これから私たちが直面するであろう災害に対しての心構えになっていくのではないかと感じています。7年前に生まれていなかった生命も、すでに小学生になっています。彼らにも、この国ではこんなことがあったんだよと伝えていくことも、大人の責任なのではという気持ちもあります。2本の映画上映を、3.11の追悼の意を込めて、そしてどの人の心にも幸せが訪れることを祈り、この日を迎えたいと考えております。

(主催者代表:特定非営利活動法人コミュニティサポートスクエア理事長 杉浦 陽之助)